

平安和文会話文における準体句 — 助詞が後接しない場合 —

土岐留美江

日本語教育講座

Quasi-nominal phrases in Heian Japanese Conversational Texts — Cases without Postpositional Particle —

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

ABSTRACT

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending), in comparison with those in other attributive constructions, such as adnominal clauses or final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese. It is revealed that there is not much similarity between quasi-nominal phrases and final-attributives in the syntax of adnominal-ending form.

The specific findings are as follows:

- (a) In quasi-nominal phrases, verbs of motion/change, verbs of emotion/thought/perception and verbs of existence are most frequent, in descending order.
- (b) In quasi-nominal phrases, all adjectives types (emotional, attributive and intermediate) are found.
- (c) In quasi-nominal phrases, past and perfect auxiliaries are found, perfect auxiliaries such as “tsu” “ri” “tari,” being the most frequent.

1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体句用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止との表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて、山内（2003）を代表とする多くの先行研究がある。

また、③の準体句用法については、断定の助動詞の活用語承接の衰退について、連体形準体法の消滅と関連づけて論じた信太（1970）や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した信太（1987）、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤（2001）などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広がりは、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②名詞句形成、③文終止、という相互にまったく異なるとされる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出（山内（2003）p.141）」と見る解釈がなされており、尾上（1982）などでも同様の立場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究においても、しばしば三つの用法が相互に関連づけられて論じられている。しかし、これら三つの用法の特徴を、データに基づき数量的に比較分析した研究は、十分なされているとは言い難い。

土岐（2005）では、連体形終止法を終止形終止法やゾ、ナム共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合を比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度に特徴があることを明らかにした。また、土岐（2008）では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終

止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは、各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

本稿では、残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについて取り上げる。土岐(2005)、土岐(2008)と同様に、連体形に現れる語を品詞別に分析し、その分布の傾向を明らかにし、他の連体形の用法と比較した場合の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。

【準体法】【連体法】

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

【連体形終止法】【終止形終止法】

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

準体法および連体法のデータは源氏物語のみに拠っており、連体形終止法や終止形終止法との採集資料数には偏りがある。ただ、連体法は他の形式と比較して突出して出現頻度が高いため、採集されたデータの絶対数は連体法が最も多い。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

3. 分析対象形式

連体形終止の用法は地の文と会話文とで大きく異なることが先行研究により指摘されており、土岐(2005)では会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較分析上、本稿で扱う準体法や連体法の用例も会話文中のデータに限定して考察を進めていく。

連体形終止法のデータについては、疑問文や反語文はいわゆる連体形終止とは用法的に大きく異なるため除外し、平叙文中のものに限定した。一方、準体法や連体法のデータは主節の文のモダリティに関わらず採用してある。文のモダリティによる相違が見られるか否かという点は、今後の課題として分析の際に留意する必要がある。他にもヨ、ヤ、カシ、カナなど、詠嘆的表現を持つ文末間投助詞が後接している場合は、連体形のみによる連体形終止とは性質が異なる可能性があるため除外した。また、「～給ふ」、「～侍り」、「(ラ)ル」、「(サ)ス」などの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合はすべて分析対象に含めてある。このような待遇表現が入る場合と入らない場合とで何らかの相違があるか否かという点についても、今後、吟味していく必要がある。

4. 分 析

4.1. 助動詞を含まない動詞準体節

準体法の用例を、終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けて、動詞の意味タイプ別に分類したのが、次の表1およびグラフ1である。土岐(2008)で明らかにした連体法の分布傾向(表1'およびグラフ1')、および土岐(2005)で明らかにした連体形終止・終止形終止の分布傾向(表1''およびグラフ1'')と比較すると、連体形終止と比較して、準体法と連体法という、ともに文中に現れる用法の分布の類似性が明らかである。

表1 準体法(助詞なし)動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	9 (69)	7 (44)	16 (55)
存在	1 (8)	3 (19)	4 (14)
感情・思考 知覚	3 (23)	6 (38)	9 (31)
計	13 (100)	16 (101)	29 (100)

グラフ1

準体法(助詞なし)動詞意味タイプ別分布

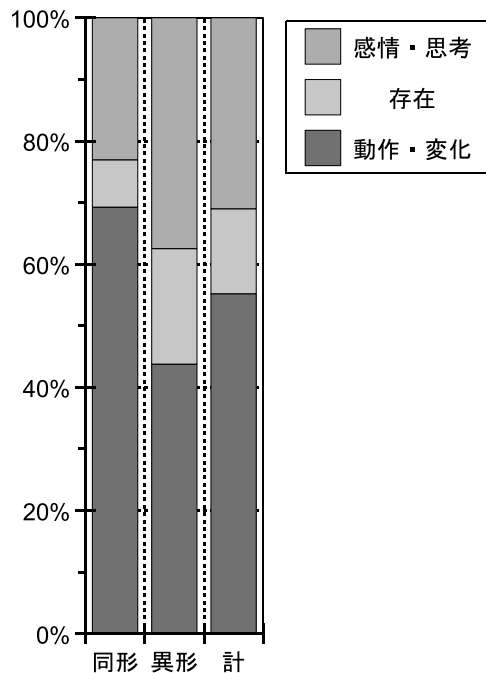


表 1' 連体法動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	491 (56.8)	240 (45.4)	731 (52.4)
存在	22 (2.5)	133 (25.1)	155 (11.1)
感情・思考 知覚	352 (40.7)	156 (29.5)	508 (36.4)
計	865 (100.0)	529 (100.0)	1394 (99.9)

グラフ 1'
連体法動詞意味タイプ別分布

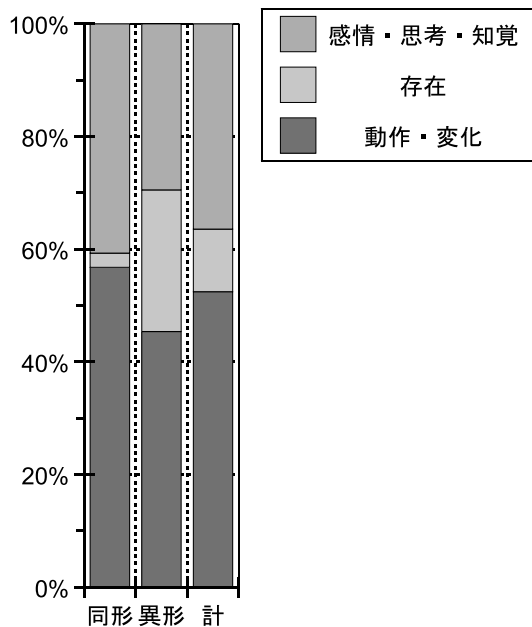
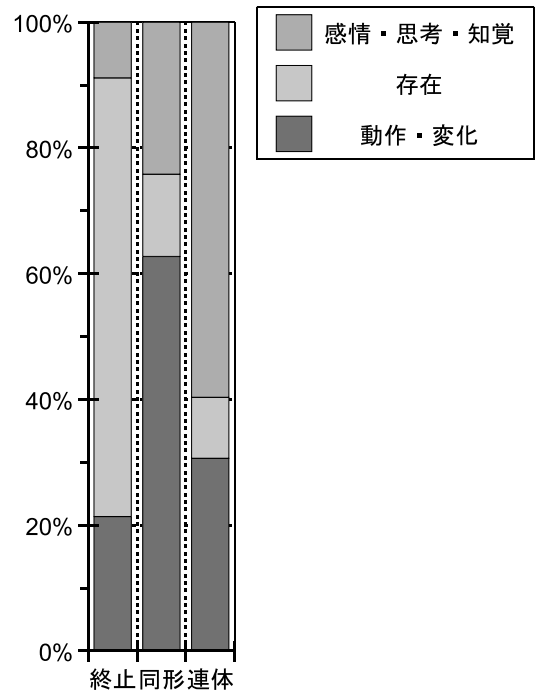


表 1'' 終止法動詞意味タイプ別分布

	終止形	終止・連体 同形	連体形
動作・変化	41 (21.4)	192 (62.7)	19 (30.6)
存在	134 (69.8)	40 (13.1)	6 (9.7)
感情・思考 知覚	17 (8.9)	74 (24.2)	37 (59.7)
計	192 (100.1)	306 (100.0)	62 (100.0)

グラフ 1''

終止法動詞意味タイプ別分布



準体法における分布は、

- 1 動作・変化動詞（5 割程度）
- 2 感情・思考知覚動詞（3～4 割程度）
- 3 存在詞（1～2 割程度）

という結果になっている。これは連体法における分布結果とほぼ同様の数値である。両者における多少の違いを指摘するならば、連体法の場合は終止・連体同形活用語か終止・連体異形活用語かによって、存在詞の占める割合に、およそ10倍（同形2.5%，異形25.1%）というかなりの開きが認められるが、準体法ではこのような活用語の種類による差異は比較的小さいという点であろう。ただし、この点も、準体法のデータの絶対数が十分とは言えないため、厳密な意味で位置づけるのは難しい。

一方、終止形終止は

- 1 存在詞（7 割程度）
- 2 動作・変化動詞（2 割程度）
- 3 感情・思考・知覚動詞（1 割程度）

また、連体形終止は

- 1 感情・思考・知覚動詞（6 割程度）
- 2 動作・変化動詞（3 割程度）
- 3 存在詞（1 割程度）

という分布であるから、準体法・連体法と終止形終止と連体形終止で、三者三様に、動詞意味タイプの分布傾向が明確に異なっている。

以上見てきたように、ともに文中に現れる連体法と準体法は、助動詞を含まない動詞節における動詞意味タイプ別内訳では、文末に現れる連体形終止法の場合

とは明らかに異なる様相を見せ、類似していることが指摘できるのであるが、次節で詳述する形容詞節との関係では両者はかなり異なっている。連体法の場合は、連体形終止法の場合と比較して、動詞節に対する形容詞節の種類の豊富さと絶対量の多さが特徴的であった。しかし、準体法の場合は、動詞節（計29例）に対して形容詞節はわずか4例（動詞節に対する形容詞節の比率はおおよそ14%）である。ちなみに、連体形終止法は連体形動詞節62例、形容詞節18例（同29%）であり、連体法は動詞連体形連体節1394例、形容詞節1573例（同113%）である。すなわち、形容詞節が圧倒的な比率を占める連体法に対して、準体法は終止法における比率よりも更に低くなっており、装丁として次に続く体言にかかっていく連体法の構文的機能が形容詞節と深い関係にある一方、事柄としてのまとまりをつけ、概念的に一旦そこで完結する機能をもつ準体法は、形容詞節と最もなじみにくいことが明らかになっている。この点については、次節で詳述する。

以下に、助動詞を含まない動詞連体節の動詞意味タイプ別全例を挙げる。

4.1.1 動作・変化動詞

【同形】

- 1) (人ども) あやしく、をともしせざりつる人のはてを、かくあつかはせ給ふ、誰ならむ (5, 295, 4)
- 2) (人々) 柳の葉を百度射あてつべき舎人どもの、うけばりて射取る、無心なりや。(3, 311, 3)
- 3) (朱雀院) 来し方の御面おも起こし給ふ、本意のごと、いとうれしくなん。(3, 210, 7)
- 4) (北方) かう思ふべうもあらぬ方にしも、なげの言の葉を尽くし給ふ、かひなげなること (4, 243, 10)
- 5) (源氏) さても過ぐしはてねば、立つ時ものうく心とまる、苦しかりき (2, 201, 1)
- 6) (尼君) まめやかにのたまふかたじけなし (1, 165, 15)
- 7) (式部卿宮) さて心づよくものし給、いとをもなう人笑へなる事なり。(3, 125, 6)
- 8) (侍従) かくのみやらせ給、なさけなきこと (5, 249, 12)
- 9) (内大臣) かくをきてきこえ給、やうあらんとは思たまへながら (2, 293, 10)

【異形】

- 10) (夕霧) 宮す所の四十九日のわざなど、大和の守なにがしの朝臣ひとり扱ひはべる、いとあはれるわざなりや。(4, 133, 14)
- 11) (尼君) 背きにし世にたち返りてはべる、かひある御事を見たまつりよろこぶ (3, 281, 1)
- 12) (源氏) われ人を起こさむ。手たゝけば山彦の答ふる、いとうるさし (1, 123, 1)

- 13) (里人) 古八の宮の御むすめ、(中略)、ことに悩み給こともなくてにはかに隠れ給へりとてさはぎ侍、その御葬送のぞうじども仕うまつり侍りとて (5, 331, 11)
- 14) (源氏) 便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬ事なり (2, 409, 7)
- 15) (家臣) 大夫はたゞ今なんまいりつる。道に御車引き出づる、見侍つ (5, 159, 1)
- 16) (朱雀院) こゝにかく世を捨てたるに、三宮のおなじごと身をやつし給へる、すべなきやうに人の思ひ言ふも (4, 135, 6)

4.1.2 存在動詞

【同形】

- 17) (惟光) むかし見たまへし女房の尼にて侍、東山の辺に移したてまつらん (1, 128, 9)

【異形】

- 18) (内舍人) 女房の御もとに知らぬところの人通ふやうになんきこしめす事ある、たい“／＼しき事なり (5, 247, 11)
- 19) (童) なをし着たる人のおはする、宮のおはしますなめり (1, 184, 11)
- 20) (源氏) 古体の御絵どもの侍る、まいらせむ (2, 174, 3)

4.1.3 感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 21) (源氏) 宿世の引く方にて、なを／＼しきことに、あり／＼てなびく、いとしりびに人わろきことぞや (3, 167, 11)
- 22) (大納言) 此宮などのめで給ふ、さることぞかし (4, 242, 15)
- 23) (大宮) いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ、心をさはがいたまふ見はべるになむ、さま“／＼にかけとめられて (3, 65, 7)

【異形】

- 24) (朱雀院) 亡き親の面を伏せ、影をはづかしむるたぐひ多く聞こゆる、言ひもてゆけば、みなおなじことなり (3, 218, 5)
- 25) (花散里) 一条の宮渡したてまつり給へることと、かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御ことにかは (4, 141, 7)
- 26) (中宮) 猶かくひとりおはしまして、世の中にすい給へる御名のやう／＼聞こゆる、猶いとあしきことなり。(4, 421, 13)
- 27) (源氏) あながちに隠して、心やすくも御覽ぜさせずなやましきこゆる、いとめざましや (2, 174, 2)
- 28) (大納言) 西の方に侍る人は、びわを心に入て侍る、さもまねび取りつべくやおぼえ侍らん。

(4, 236, 11)

- 29) (源氏) 衛門督心とゝめてほゝ笑まるゝ、いと心はづかしや (3, 404, 10)

4. 1. 4 文脈における準体句の位置づけ

1) ～29) の用例の文脈における準体句の位置づけについて、後接の句における準体句の役割と、後接の句の形式を以下にまとめる。

【動作・変化動詞】

- ◎ 1 主題 疑問詞「誰」+なり+む
- 2 主題 形容動詞
- 3 主題 形容詞
- 4 主題 形容動詞+こと
- 5 主題 形容詞
- 6 主題 形容詞
- ◎ 7 主題 形容詞・形容動詞+こと+なり
- ◎ 8 主題 形容動詞+こと
- ◎ 9 主題 やう+あり
- 10 主題 形容動詞+わざ+なり
- 11 連体 かひ+あり
- 12 主題 形容詞
- 13 関係 その
- 14 主題 修飾節+こと+なり
- 15 対象 知覚動詞「見る」
- 16 主題 形容詞 (対象 思考動詞「思ふ」)

【存在動詞】

- 17 対象 動詞「移す」(「女房」と同格)
- 18 主題 形容詞+こと+なり
- 19 主題 推量 (説明)
- 20 対象 動詞「参る」(「御絵」と同格)

【感情・思考・知覚動詞】

- 21 主題 形容詞+こと+ぞ
- 22 主題 さる+こと+ぞ
- 23 対象 知覚動詞「見る」
- 24 主題 形容詞+こと+なり
- 25 主題 形容動詞+こと+なり
- 26 主題 形容詞+こと+なり
- 27 主題 形容詞
- 28 接続 さも
- 29 主題 形容詞

用例 1, 7, 8, 9 は、それぞれ、それまでの内容をまとめて事柄として体言化し、文脈的に次へ承けていく流れが認められるため、準体句の用例に含めたものであるが、これとよく似た用例は、終止形や連体形の終止法の場合にも見られる。土岐 (2005) では、評価用法として詳述した。事態への非難の意味合いを含ませて、行為主体へのマイナス評価を表す用法である。用例 1, 7, 8, 9 は、もし、ここで一旦文が終結すると見なせば、準体法ではなく、終止法の評価用法として扱うことになる微妙なケースであると言え

る。

また、用例 1 の場合、後続の「誰ならむ」は直接には準体句より前の「(をともしざりつる) 人」を承けており、準体句の内容は、その関連の説明にはなっているが、厳密な意味で「人」と同格的な資格があるかどうか疑わしい例である。また、やや事情は異なるが、文脈上の意味関係が明確でないという点では、用例 28 も注意を要する。例 1 は、「扱ふ」の対象を後続で「誰ならむ」と承けていたが、例 28 は「心に入て侍る」の主体が後続の文脈で言及されている分、多少文脈的にはわかりやすい。しかし、なぜここが連体形でなければならないのか、という点では、終止より多少後続との続き具合が濃厚であるからとしか言いようがない。たとえ終止形であったとしても不自然と言えるほどの違いは認められないのである。終止法であったとしても文脈上、格段の不都合が生じるわけではないという点では、例 13 も同様である。

逆に後続への続き具合が連体法とほぼ同じ程度に強く、その意味で準体法であることが疑わしいものは例 11 である。準体句の後に読点を置かず、連体法として読んでも格段の不都合は生じない。ただ、叙述が続くため、いくぶん長たらしく感じられるだけのことであり、ここが準体句でなければならない構造的に明確な理由があるわけではない。

動作・変化動詞や、感情・思考・知覚動詞における典型的な準体法の例では、準体句の内容を形容詞や形容動詞相当の語句で評価する構造になっている。また、更にそのような形容詞の後に「～ことなり」「～ことぞ」と形式名詞を用いた断定辞がくるケースも多い。また、例 15 や 23 のように、後接の語句が「見る」「思ふ」などの場合は、準体句の内容は、知覚や思考の対象を表す。例 16 では、準体句「身をやつし給へる」を直後の「すべなし」で承けていると見る場合は、典型的な評価的形容詞の構造である。ただ、それより後の「人の思ひ言ふも」にもかかっていくと見る場合は、準体句はカッコ内に示したように、思考動詞「思ふ」の対象として機能していることになる。

存在動詞においては、例 18 のように、動作・変化動詞や感情・思考・知覚動詞と同様な、準体句の内容を承けて「評価的形容詞+こと+なり」と後続する典型的な構造も見られるが、例 17 や例 20 のように、準体句がそれより前に既出の「女房」「御絵」などの体言と同格となって、後続の動作動詞の行為の対象を表す場合が多い。また、例 19 のように準体句までの内容 (事態) 全体を、後続する文脈で説明する関係になっているケースも見られる。

4. 2. 助動詞を含まない形容詞準体節

形容詞の準体法 (助詞なし) の例は非常に少ない。形容詞の意味について、A B C の類型を立てて考察し

た吉田（1995）にならい、おおまかに、A情意的（感情形容詞、評価形容詞）、C属性的（次元形容詞（注2）、色彩形容詞、その他）、その中間的なB（否定形容詞、程度形容詞、感覚形容詞、時間形容詞）という三つの類型に分け、更にAの感情・評価形容詞の評価の意味について、プラス評価は+、マイナス評価は-という独自の符号を付したのが、次の表2である。

表2 準体法（助詞なし）形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	2	B	0
人げなし	1	A	-
もの思はし	1	A	-
若し	1	C	0

意味類型については、「人げなし」と「もの思はし」の各1例がAの情意的形容詞で、かつ、マイナス評価のものである。「なし」の2例が中間的なBであり、「若し」の1例がCの属性的形容詞である。絶対数が少ないこともあり、積極的にプラス評価の意味合いを持つ形容詞は認められない。

形容詞の出現率については、動詞節に対して、準体法14%（動詞節29例、形容詞節4例）、連体形終止法29%（動詞節62例、形容詞節18例）、連体法113%（動詞節1394例、形容詞節1573例）となっており、4.1でも述べたように連体節と形容詞との緊密な関係がデータにおいても裏付けられる一方で、準体法は対照的に形容詞率が低い。

また、形容詞節に現れる形容詞の意味類型については、準体法、終止法、連体法すべてにおいて、Aの情緒的形容詞が現れる率が圧倒的に高いのであるが、その中でも、とりわけ連体形終止法は情緒的形容詞に偏り、B（中間的）の「なし」が見られる以外はすべてA（情緒的）形容詞であった。評価の意味合いで見ても、明らかなプラス評価のものは「良し」一種類しか見られず、マイナス評価に偏る傾向があった（土岐（2005））。

一方、連体節に現れる形容詞は、総数も種類も格段に多く、意味類型的には、終止法の場合にはまったく見られなかった「深し」「近し」「高し」「多し」などのCの属性的形容詞が上位に含まれており、更に、評価の意味合いの点でも「良し」「かしこし」「をかし」「ありがたし」「めでたし」「やむごとなし」など、明らかなプラス評価のものが上位に見られた（土岐（2008））。

連体法と終止法の形容詞については、6例以上出現した形容詞に限定した分析である。準体法の場合は、形容詞全体の総数が5例であり、いずれも一種類の形容詞で6例以上現れるものはないため、厳密な意味で

の比較は難しい。ただ、プラスの評価の意味合いを持つものは一種類も見られないこと、しかし、5例中2例が、評価的に特にマイナスな意味合いを感じさせるわけではない「なし」であること、等を鑑みると、意味的類型や評価の意味合いに偏りのある終止法と、あまり偏りが無い連体法という構図における準体法の位置づけは、両者の中間あたりということになる。

以下に準体法（助詞なし）形容詞の全用例を示す。

- 30) (薫) さる方に見所ありぬべき女の、もの思はしき、うち忍びたる住みかども、山里めひたる隈などに、をのづから侍べかめり。(4, 326, 1)
- 31) (源氏) もとの品高く生まれながら身は沈み、位みじかくて人げなき、又なを人の上達部などまで成り上りわれは顔にて家のうちを飾り、人におとらじと思へる、そのけぢめをばいかゞ分くべき (1, 35, 15)
- 32) (源氏) 言葉のかぎりまばゆくほめをきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることの中に、げにと見え聞こゆる事なき、いと見をとりするわざなり。(2, 442, 4)
- 33) (源氏) 夏の月なきほどは、庭の光なき、いとものむつかしくおぼつかなしや (3, 30, 12)
- 34) (僧都) 今は、たゞ御をこなひをし給へ。老いたる、若き、定めなき世なり。(5, 372, 12)

動詞の場合と同様に、30)～34)の用例の文脈における準体句の位置づけについて、後接の句における準体句の役割と、後接の句の形式を以下にまとめる。

- 30 主体 動詞「忍ぶ」（「女」と同格）
 31 関係 その
 32 主題 修飾節+わざ+なり
 33 主題 形容詞
 34 主題 形容詞

やはり動詞の場合と同様に、準体句の内容が主題として機能し、評価的な形容詞や修飾節を伴う形式名詞プラス断定辞が後続する構造が多い。また、例30のように後続の文脈の動詞の主体となっているケースもあり、例31のように後続する文脈に、連体的に繋がっていくケースもある。これらは動詞の場合にも同様に見られたものである。

4.3. 助動詞を含む準体節

受け身と自発の（ラ）ル、使役の（サ）スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について総数が多い順にまとめたのが次の表3である。同様に連体法と連体形終止法についてまとめたのが次の表3'と表3''である。

助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、ここでは土岐

表3 準体法（助詞なし）
助動詞総数順

形式	総数
ム	20
タリ	19
ケリ	17
リ	13
キ	12
ツ	10
ラム	7
ズ	6
体言ナリ	4
メリ	3
終止ナリ	1
連体ナリ	1
ベシ	1
ヌ	1

表3' 連体法
助動詞総数順

	総数
ズ	557
キ	433
ベシ	431
ム	414
体言ナリ	407
タリ	345
リ	193
ケリ	178
マジ	113
ツ	97
ヌ	56
メリ	41
ケム	35
ラム	28
マホシ	17
終止ナリ	12
ル	12
ラル	10
マシ	4
ス	4
ジ	2
サス	1
連体ナリ	1

(2005)と同様に、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

準体法では、終止・連体異形の助動詞に関しては、タリ、ケリ、リ、キ、ツなどの過去・完了系の助動詞が上位を占めている。終止・連体同形のム、ラムなどを加えると、推量のムが最も多いが、実数としてはムが20例に対して、タリ19例、ケリ17例、リ13例、キ12例、ツ10例、ラム7例、と分布はほぼ近接しており、推量系が飛び抜けて多いわけではない。また、否定のズが6例でラムのすぐ次に続く。完了のヌが1例しか見られず、同列最下位に位置していることが、助動詞の意味類型から考えるとやや説明し難い。ただ、ヌについては、土岐（2005）で終止法における連体形終止率を分析した際にも、同様に、ツとはやや異なる傾向を見せていた。今回の準体法における出現率についても、ヌがツとはやや異なっている点で、同様の結果となっていると言えよう。

一方、連体法では、否定のズが557例と最上位を占める。次に、過去キ433例、推定ベシ431例、終止・連体同形の推量ム414例、断定ナリ407例と続く。以下の分布を見ても、過去・完了系の助動詞と推量系の助動詞とで格別の秩序は認められず、助動詞の意味タイプにより何らかの分布傾向があるとは認められない。

また、連体形終止法では、終止・連体異形の助動詞に関しては過去キが75例と最も多く、続いてケリ57例、ツ54例、やや落ちて推量系のベシ23例、メリ22例、否定のズ19例、タリ19例、リ19例、ヌ13例と続く。過去・完了系が上位に位置する傾向はあるが、準体法の場合ほど明確ではなく、推量系のベシやメリもかなりの割合で現れる。連体形終止の場合は、終止・連体同形の助動詞は、準体法や連体法のように構文的な判断基準がなく単なる終止形終止との区別がつかないため、別表3"-2にまとめた。これを見ると、推量ムが1325例と抜きん出て多く、次が否定推量ジで367例である。終止・連体異形の助動詞中、最も多かった過去キと比較すると、ムは17.7倍、ジは4.9倍となる。

以上の分析から、準体法は、特に助動詞の意味による偏りが見られない連体法や、かなりの割合で推量系助動詞が現れる終止法と比較して、過去や現在における事実を表す助動詞が上位に分布する点が特徴であると言えよう。これは、事柄を一旦まとめ上げる準体法の構文的機能に沿った結果であると考えられる。

表3と表3'から、終止・連体同形の助動詞ム、ケム、ラム、マシ、ジを除き、表3"-1と終止法のデータを加えて、出現総数に占める準体法の割合をパーセンテージで示したものが次の表4およびグラフ4である。

やはりツ、リ、タリといった完了の助動詞が上位を

表3"-1
連体形終止法
助動詞総数順

形式	総数
キ	75
ケリ	57
ツ	54
ベシ	23
メリ	22
ズ	19
タリ	19
リ	19
ヌ	13
ラル	5
ムトス※	4
終止ナリ	3
マジ	2
マホシ	1
ル	1
体言ナリ	0
連体ナリ	0
ジトス	0

※ムズ(ンズ)を含む。

表3"-2
同形終止法
助動詞総数順

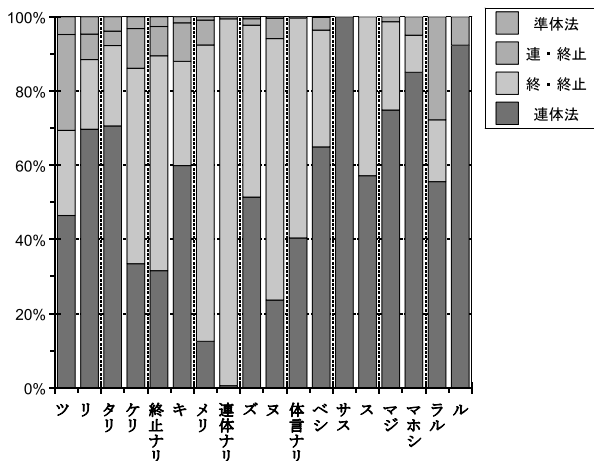
形式	総数
ム	1325
ジ	367
ラム	67
マシ	66
ケム	23
ラシ	2

占める。過去のケリ、キが続き、その間に推量系の終止ナリが現れている。個別の助動詞ごとの準体法出現率で見た場合、現在に繋がる事実を表す助動詞が上位を占める傾向が、より明確に現れる。

表 4 準体法率順 助動詞活用分布

形式	連体法	終・終止	連・終止	準体法	計	準体法率 (対計%)
ツ	97	48	54	10	209	4.78
リ	193	52	19	13	277	4.69
タリ	345	106	19	19	489	3.89
ケリ	178	280	57	17	532	3.20
終止ナリ	12	22	3	1	38	2.63
キ	433	203	75	12	723	1.66
メリ	41	262	22	3	328	0.91
連体ナリ	1	174	0	1	176	0.57
ズ	557	502	19	6	1084	0.55
ス	56	167	13	1	237	0.42
体言ナリ	407	597	0	4	1008	0.40
ベシ	431	209	23	1	664	0.15
サス	1	0	0	0	1	0.00
ス	4	3	0	0	7	0.00
マジ	113	36	2	0	151	0.00
マホシ	17	2	1	0	20	0.00
ラル	10	3	5	0	18	0.00
ル	12	0	1	0	13	0.00

グラフ 4 準体法率順 助動詞活用分布



5. おわりに

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の準体句（助詞が後接しない場合）のデータを分析した結果、以下のような特徴が観察された。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞の意味タイプは、
 - 1 動作・変化動詞
 - 2 感情・思考・知覚動詞
 - 3 存在詞
 の順に多い。
2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、現れる形容詞の意味類型は
 - A 情緒的
 - B 中間的
 - C 属性的形容詞

のすべてが現れる。

また、評価の意味を有する形容詞の場合、積極的にプラス評価の意味合いを持つ形容詞は認められない。

3. 助動詞を含む準体句の場合、過去・完了の助動詞、中でもとりわけツ、リ、タリといった完了の助動詞が上位を占める。

連体形（終止形）終止法および連体法の場合と比較すると、1については、感情・思考・知覚動詞が圧倒的に多い連体形終止とも、存在詞が圧倒的に多い終止形終止とも異なっており、連体法における分布結果とほぼ同様の数値となっている。連体法の場合は終止・連体同形活用語か終止・連体異形活用語かによって、存在詞の占める割合に、およそ10倍（同形2.5%、異形25.1%）という開きが認められるが、準体法ではこのような活用語の種類による差異は比較的小さい。ただし、この点も、準体法のデータの絶対数が十分とは言えないため、厳密な意味で連体法との違いとして位置づけるのは難しい。

2の形容詞の出現率については、動詞節に対して、準体法14%（動詞節29例、形容詞節4例）、連体形終止法29%（動詞節62例、形容詞節18例）、連体法113%（動詞節1394例、形容詞節1573例）となっており、連体節と形容詞との緊密な関係が伺われる一方で、準体法は対照的に形容詞率が低い結果になっている。また、意味類型については、「若し」の1例がCの属性的形容詞であり、「なし」の2例が中間的なB、その他はAの情緒的形容詞で、かつすべてマイナス評価のものであることから、情緒的形容詞の中でも、特にマイナス評価の意味合いを含むものに偏っている連体形終止と、あまり偏りが無い連体法に対して、準体法は両者の中間的様相を示している。

3については、準体法は、助動詞の意味による偏りが特に見られない連体法や、推量系助動詞が目立つ終止法と比較して、過去や現在における事実の存在を示す助動詞が上位に分布するということは、事柄を一旦まとめ上げる準体法の構文的機能に沿った結果であると言えよう。

以上、土岐（2008）で明らかになった、意味的に分布の偏りの少ないニュートラルな文法機能形式と言える連体法と、強い意味的分布の偏りを示す連体形終止法という構図に、本稿での準体法の分析結果を加えてみると、準体句と連体形終止との共通点は多くなく、先行研究で言われるように、連体形終止を準体句の直接表出として原理的に直接に結びつけて論じることへの妥当性に疑問が生じる。この疑問を解決するには、助詞を伴う典型的な準体句の分析が必要となる。今後の課題としたい。

主要参考文献

- 尾上 圭介 (1982) 「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講座日本語学2 文法史』1-19
- 同 (2001) 『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
- 小池 清治 (1967) 「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」『国文学言語と文芸』54, 12-21
- 近藤 泰弘 (1986) 「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』5-2, 22-30
- 同 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 近藤 泰弘 (2001) 「名詞節と項構造」『日本語文法』1-1, 41-52
- 信太 知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82
- 同 (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法について—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」
- 土岐留美江 (2005) 「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4, 16-31
- 同 (2008) 「平安和文会話文における連体修飾連体形と連体形終止連体形の比較分析」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』57, 55-62
- 山内洋一郎 (1959) 「院政期の連体形終止」『国文学攷』21, 240-250 (広島大学国語国文学会)
- 同 (1963) 「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30, 33-41 (広島大学国語国文学会)
- 同 (1964) 「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」『広島大学文学部紀要』23-3, 125-152
- 同 (1970) 「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観点から—」『国文学攷』54, 55-58 (広島大学国語国文学会)
- 同 (1992) 「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』25-44 (和泉書院)
- 同 (1997) 「助動詞「うず」の連体形終止について—中世における終止形の残存—」『文教国文学』37, 1-8
- 同 (2003) 『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版
- 吉田 光浩 (1995) 「平安期形容詞の意味と終止用法について—『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・敦子先生古希記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』112-145 (明治書院)
- IWASAKI, Shoichi (2000) “Suppressed Assertion and the Functions of the Final-Attributive in Prose and Poetry of Heian Japanese”. Susan C. Herring, Peter van Reenen and Lene Schosler (eds.) *Textual Parameters in Older Languages*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 237-272

(2008年8月28日受理)